【別添１】

２１	多治見市立笠原小学校　外１校	27～29

平成２９年度研究開発実施報告書（要約）

１　研究開発課題

国際社会において必要とされるコミュニケーション能力を育成するため，小学校第1学年から英語科を開設した場合における，中学校の教育課程を含めた9年間を通じた系統的な教育課程，指導方法及び評価方法の在り方についての研究開発を行った。

２　研究の概要

小学校第1学年から英語科を開設し，小・中学校9年間を通じた系統的な英語教育を展開する。これにより，英語科の義務教育修了段階の到達目標の引き上げを図るとともに，各学年の到達目標を明確にした。

小学校においては，これまで外国語活動として実践してきた教育課程を，その効果を損なうことなく円滑に英語科に転換するための効果的な指導方法を究明した。加えて，評価内容及び，評価方法についても究明した。

中学校においては，スタートカリキュラムを含め，小学校において高められたコミュニケーション能力の基礎を受けて，中学校における英語科指導の改善すべき要件を究明した。さらに，これらの実践の効果を高める小・中学校連携や教育環境の充実を図った。

３　研究の目的と仮説等

（１）研究仮説

英語教育を効果的に進めるための環境を充実させ，小・中学校が効果的に連携を図り，9年間を通じて「笠原型コンテント・ベイスト」の手法を用いた授業づくりを工夫すれば，目指す児童生徒の姿が具現される。

ここでいう「目指す児童生徒の姿」とは，「学習した英語表現を駆使して，互いの思いや考えを，正確・適切にコミュニケーションすることができる児童生徒」である。

（２）研究の目的

①昨年度までの小・中共通の成果と課題

「コミュニケーション能力の素地（小学校）・基礎（中学校）の段階表」を作成することで，児童生徒の目指す姿の明確化を図ることができ，各学年の到達目標，各単元及び単位時間の指導目標並びに評価規準を適切に設定するとともに，効果的な指導の手立てを講じることができるようになった。

今年度は，それらを評価規準となりうる状態にまで掘り下げ，英語科の免許をもたない教員が見ても分かりやすいものに改善していくことに取り組んだ。

②小学校における課題と取組内容

小学校では、昨年度末，作成した「目標の段階表」を基に各単元，各単位時間の評価規準を設定し，実践を行った。これらの実践を通して，評価方法と言語材料の習熟と定着を図る指導の在り方に課題が残った。

今年度は，各単元・単位時間に設定した評価規準を適切に評価する方法を究明していくとともに，基本となる言語材料の習熟と定着を図る指導方法を究明していくことに取り組んだ。

③中学校における課題と取組内容

中学校では昨年度，小学校英語教育との円滑な接続を図る「スタートカリキュラム」の開発を行い，その要件を明らかにした。小・中学校の連携においては，情報交換・交流・カリキュラムの連携の各段階で実践すべき具体的な内容を明らかにし，日常的な連携体制を確立した。また，英語教育を支える環境や体験活動の充実にも取り組み，効果を上げた。

今年度は，小学校段階に英語科を開設することを受けた，小・中学校英語教育のさらなる円滑な接続の在り方を究明していくとともに，即興的なやり取りの強い要素を含んだ言語活動の充実や正確性を高めるための指導について追究していくことに取り組んだ。

（３）教育課程の特例

・小学校第1・2学年：生活科を年間35時間削減し，英語科を年間35時間実施した。

※生活科の時数減は，英語科の学習の中で生活科の内容も取り扱うことにより対応した。例えば，第1学年英語科の単元「みんななかよし」では，生活科の9内容のうち，内容（1）「学校生活を支えている人々や友達」を取り扱った。また，第2学年英語科の単元「水に入れると・・・？」では，内容（6）「自然や物を使った遊び」を取り扱った。

　このように，第1学年では，英語科の学習全11単元・35時間のうち，4単元・13時間において，また，第2学年では，英語科の学習全11単元・35時間のうち，4単元・14時間において生活科の内容を取り扱った。このことにより，生活科の授業時数が減少しても，生活科の目標は十分に達成できると考えた。

・小学校第3・4学年：総合的な学習の時間を年間60時間削減し，英語科を年間60時間実施した。

・小学校第5・6学年：総合的な学習の時間を年間35時間削減するとともに，外国語活動を年間35時間削減し，英語科を年間70時間実施した。

※第3～6学年における総合的な学習の時間の時数減は，英語科の題材内容において総合的な学習の時間で学ぶべき視点も取り扱うとともに，問題解決的な活動を行い，表現力を高めることによって総合的な学習の時間に期待される資質の向上が図られるようにした。例えば，第6学年の単元「中学校ってどんなところ？」では，「国際理解」の視点から様々な国の学校生活について調べ，整理・分析・表現することを通して主体的な問題の解決を促した。

　このように，第3～6学年では，英語科全40単元・260時間のうち，13単元・91時間において，「郷土」「健康」「環境」「国際理解」等，総合的な学習の時間で学ぶべき視点を取り扱った。また，調査・整理・分析・表現等の探究のプロセスにより，問題解決的な活動となるよう授業展開を工夫した。このことにより，総合的な学習の時間に期待される資質の育成が十分図られると考えた。

４　研究内容

（１）教育課程の内容

①小学校英語科実施学年及び各学年の指導時数について

　第1・2学年では年間35時間，第3・4学年では年間60時間，第5・6学年では年間70時間の英語科を実施した。身の回りのものに興味・関心がより高く，体全体を使って活動することが容易な第1学年から英語科を実施することで，児童が英語を使ってコミュニケーションを図る楽しさや大切さを十分に体験することができた。この授業時数により，各単元の内容も身近なことから外国のことへ，自分の嗜好から生活や将来の夢へなど，学年に応じて発展的に扱うことができた。さらに，ゲーム形式からインタビュー形式，そして，Show & Tell 形式の学習へと各学年の単元に発展性をもたせて構成することができ，児童が過度な負担を感じることなくコミュニケーションを楽しみながら，十分に英語の音声や基本的な表現及び文字や文構造に対しての習熟・定着を図ることができた。

②指導目標について

・小・中学校９年間を貫く英語科の目標の作成

　昨年度作成した「笠原小学校・笠原中学校『外国語（英語）科』における目標の段階表」（以下「目標の段階表」という。）に具体的な「評価時期・方法」を加えて改善を図った。また，同様に小学校第1学年から中学校第3学年において学年別に整理した「学年毎の目標の段階表」を設定した。

　昨年に引き続き，目標は英語科の評価の4観点（「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」，「外国語表現の能力」，「外国語理解の能力」，「言語や文化に関する知識・理解」）で設定した。今年度は，「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」において，「コミュニケーションへの取組」と「コミュニケーションの継続」の明確な区別が難しいという考えから，それぞれを「積極的に～している。」と「～し続けている。」という文末表現で統一することを基本とした。

　「外国語理解の能力」・「外国語表現の能力」については，岐阜県教育委員会が示している例にならい，「話題・内容・表現（理解）方法・程度」という4つの視点を盛り込み，通して一文となるようにした。「技能」については，「話すこと」を「Spoken Interaction」と「Spoken Production」，「読むこと」を「内容理解」と「音読」に分け，「聞くこと」と「書くこと」を合わせて6つに分類した。

　その結果，小・中学校ともに，指導に当たる教師が各学年で目指す生徒の具体的な姿に加え，小・中学校9年間を見通して各単元で身に付けさせる力や指導事項について共通理解して指導を行うことができ，単元指導計画にもそれらを反映させることができた。これは，特に英語科の免許を所有していない小学校教員にとっては，どの時期にどんな力を付ければよいのかをイメージしながら授業実践を行うことに役立った。

また，小学校においては，この「目標の段階表」を基に「CAN-DO リスト」や振り返りシートを作成することができ，大きな役割を果たし，パフォーマンステストの充実もつなげることができた。

③指導内容と指導計画について

ア【小学校】指導計画の見直しについて

昨年度は，小学校での英語科の目標を中学校英語科の目標に準ずるものにするために，評価規準の観点を大きく4つ設定し，それらをさらに細分化した8項目で評価規準を設定し，指導を行った。

しかし，評価しなければならない規準が多く，適切に評価することが難しい場面があった。そこで，今年度は，単元毎に設定している中心となる指導事項に合わせ，重点となる評価規準に絞って評価することを試みた。

イ【中学校】指導計画の工夫について

・単元指導計画の改訂

単元における単位時間の役割が分かる「単元構想図」として昨年度作成したものを，よりその役割が明確になるように「単元指導計画」と改めた。また，昨年度は，「導入の時間」→「基本的な表現を整理する時間」→「正確にアウトプットする時間」→「自分の考えや気持ちを付け加えてアウトプットする時間」→「活用する時間」の５つに分類していたが，役割をより明確にするために，「正確にアウトプットする時間」を「正確性を高める時間」とし，「自分の考えや気持ちを付け加えてアウトプットする時間」を「即興性を高める時間」へと改めた。このことにより，それぞれの時間の指導内容や指導方法をより一層明確にすることができた。また，昨年度同様に単元を通して，理解・練習する活動と伝え合う活動を効果的に位置付けた。ターゲットとする英文を決め，伝え合う活動においてその英文を繰り返し用いることによって，正確・適切に使用することが可能となると同時に，終末の活動に向けて習熟度を高めることができた。

さらに，「評価規準」についても見直しを図った。これまでの単元指導計画は，「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」では「コミュニケーションへの取組」と「コミュニケーションの継続」というように，全８観点にそれぞれ評価規準を盛り込んで作成していた。しかし，今回の改訂では，その単元の中で何ができるようになればよいのかを吟味し，生徒の評定に直接関わる観点に絞って評価規準を設定した。そして，それを見届けるための方法や手段を明記し，「評価規準・方法」としたことにより，教員間で共通理解して授業に臨むことができた。そして，それを生徒に示す振り返りシートにも反映し，その単元で目指す姿を焦点化して示すことができた。

・スタートカリキュラムの作成

中学校第1学年において，小学校の英語学習との円滑な接続を目指し，生徒が安心して中学校の英語学習に進むことができることを目的として，小学校と同じ教材・教具を用いたり，同じ言語活動を行ったりするスタートカリキュラムを作成した。今年度も，指導内容の系統性や指導方法の継続性を大切にして指導に当たった。

教科書題材に入る前の「スタートの時間」については，「スタートの10時間」として実施した。今後は小学校外国語科の「書くこと」の指導の完全実施を踏まえ，時間数を短縮していく方向である。これにより，より早い時期に教科書題材に入ることができると考える。

教科書を用いた指導では，今年度も Lesson 7までをスタートカリキュラムの対象単元と考え，教科書で使用される言語材料の確実な定着を図るために Picture Telling や Retelling を行い，正確性や即興性を高めるための指導を行った。また，即興的なやり取りの要素が強い対話活動を多く取り入れたことで，「もっと自分の考えや気持ちを伝えたい。」，「どう表現すればいいのだろう。」という気持ちの高まりが見られ，英語の授業に主体的に取り組むことができただけでなく，英語を即興的に運用することができるようになった。「スタートの時間」については，小学校のカリキュラムに左右されることが多いため，小中兼務教員を中心として，小学校での学習内容を確実に把握し，その都度改善を図る必要がある。

④指導方法について

ア　小学校について

・単元における習熟・定着を図るための指導

習熟・定着を図るために，以下の3点を指導の重点とした。

・単位時間の導入部分において，既習の言語材料を用いて行うことのできる学習活動を仕組むこと。

・単位時間におけるコミュニケーションを図る活動の中間交流会のもち方を改善すること。
・単位時間の終末において，ねらいの達成状況を図るチェックタイムを設定すること。
これらを意識した指導を行うことで，言語材料の定着を図っていくことができるだろうと考えた。

【「単位時間の導入部分において，既習の言語材料を用いて行うことのできる学習を仕組むこと」に関わって】
単位時間の導入部分（5分程度）において，既習の言語材料を用いて行うことのできる活動（“Small Activity”）を実施した。既習表現の習熟・定着をねらい，既習の言語材料を使って活動することを基本としている。発達の段階に応じて，低学年では，英語の歌を歌ったり，カルタやビンゴをしたりすることもあるが，主にコミュニケーション活動を通して，習熟・定着を図っている。その際，特に高学年では，決まった表現だけではなく，例えば，“animal” というテーマを与え，“What animal do you like?” “Do you like dogs?” などの複数の表現を用いてコミュニケーションするなど，習熟・定着を図ると同時に，児童の即興性を高めることをねらう活動として設定した。

【「単位時間におけるコミュニケーションを図る活動の中間交流会のもち方を改善すること」に関わって】
単位時間におけるコミュニケーションを図る活動の中間交流会のもち方を改善した。これまで，コミュニケーションを円滑に行うための方略に関わる児童のよい姿を取り上げて全体に広めることを優先していたが，「正しく言語材料を使うことができているか」，「言いたいことを英語で表現できているか」という視点を大切にし，習熟が不十分であれば，再度，全体や個人での練習の時間を確保した。

【「単位時間の終末において，ねらいの達成状況を測る“Check Time”を設定すること」に関わって】
授業の終末には，本時のねらいの達成状況を確かめるための“Check Time”を位置付けた。『外国語表現・外国語理解の正確さ』を測ることを目的とし，その時間の中心となる指導内容に合わせて，活動の工夫をした。直接，評定につながる評価は行っていないが，児童自身が理解の程度を適切に自覚したり，達成感を味わったりすることができるようにと考えた。

・文字指導の改善
特に高学年において，より多く児童が文字に触れる機会をもつことができるように，文字指導に特化していない単元においても言語材料を読んだり書いたりする学習を設定した。発達の段階に応じて，単語を読むことから始まり，文を書くことまで，様々な文字学習を授業内容に合わせて実施した。具体的には，単位時間で学習し，十分に音に慣れ親しんでいる単語（文字で表したもの）をイラストとマッチングさせたり，“This pizza has _____.”の下線部に，単位時間で使用したワードバンクや文字入りイラストカードを手がかりに書き写したりする学習を行った。
毎時間の積み重ねにより，文字への慣れ親しみが深まった。以前に比べると，類推して単語を読もうとする児童や英単語や英文を早く書くことができるようになった児童，アルファベットの形や4線上での位置を意識して書き写すことのできる児童が増えた。また，音声でやり取りした内容を文字で通して確認することができるため，次時以降のより正確な発話へとつながった。

・小学校英語科の評価
小・中9年間を見通して作成した「目標の段階表」を基に，各単元の評価規準の見直しを図った。また，それぞれの観点について評価の場と方法を明らかにした。
「コミュニケーションに関する関心・意欲・態度」と「外国語表現の能力（話すこと）の【正確さ】【適切さ】」，「外国語理解の能力（聞くこと）の【適切さ】」を測るためにパフォーマンステストを作成し，前期2回，後期2回の年間計4回実施した。第1～3回は直前に学習した単元で行った活動形式を用い，身に付けた態度や能力を評価することとした。また，長期にわたる定着状況を測るために，学年のまとめである第4回は，1年間で学習した内容をできる限り網羅して作成した。「外国語表現の能力（書くこと）の【正確さ】」及び「外国語理解の能力（読むこと）の【正確さ】」については，文字学習に特化した単元の後にペーパーテストを行った。「言語や文化についての知識・理解」については，単元の終末に5問程度からなる「チャレンジクイズ」を行い，その単元における基本表現に関する知識の定着状況を見届け，評価した。
また，各単位時間の評価については，活動中に本時のねらいを達成している児童にステッカーを渡して価値付けた。児童はステッカーを「コメントシート（単元の各時間の振り返りシート）」に貼りためていった。指導者は授業後にステッカーを受け取っている児童を確認し，次時には前時のねらいの達成が不十分だった児童（ステッカーをも

らっていない児童)を中心に支援するなど，意図的な個別指導に役立てるとともに，児童全員がねらいを達成する指導をすることにつながった。

また，児童にとって目指したい姿を一覧にした「Can-Do リスト」も作成した。学期の最初に半年間の目当てが書かれたリストを配付し，単元が終わるごとに，個々の達成度に合わせて色を塗ることで自己評価できるようにした。

イ　中学校について

・正確性と即興性を高める指導の工夫

昨年度同様，教科書を用いた指導については，正確性と即興性のどちらにより重点を置くかを明確に区別して指導に当たった。

「正確性を高める時間」では，ターゲットとなる基本表現を正確に運用することを目指した。以下，1単位時間の流れを説明する。まず，教科書の内容理解を行った後で，教科書内容を基本表現を含む4～5文に整理する。そして，その英文が書かれた音読シートを用いて音読練習する。文字を見てつまずくことなく読めるようになった後，それぞれの英文の内容を表す絵を見て説明する Picture Telling 1 を行う。次に，教科書の写真や挿絵だけ載せたプリントを用いて，Picture Telling 2 を行う。そして最後に話した内容を書きまとめ，ペアで添削した後，教師による添削を行った。このように，「音読」→「Picture Telling 1」→「Picture Telling 2」→「書きまとめ」，と，同じ表現を異なる手法で段階を踏んでアウトプットさせることで，正確性を高めることができた。また，これまで Retelling として捉えていたものを，Picture Telling と Retelling に細分化し，絵や写真に描かれていることを忠実に表現するものは Picture Telling，内容理解の後に，自分の考えや気持ちを付け加えながら説明するものは Retelling と定義した。この考えから，「正確性を高める時間」において行っていたものは，Picture Telling であるという認識を得た。音読練習でインプットした英文を正確にアウトプットするための活動として，絵や写真を載せたワークシートを用いて，段階に合わせて「Picture Telling 1」と「Picture Telling 2」を行うことで，より一層の正確な表現の定着を図り，正確な表現を身に付けさせることができた。また，昨年度から課題として挙がっていた，質問文やその応答文など，ターゲットとする英文が，相手との会話のやり取りが不可欠となる場合においては，スキット発表のように，ペアで役割をもたせて Picture Telling することで問題を解決することができた。

「即興性を高める時間」は，「音読」→「Retelling」→「書きまとめ」という流れを基本としている。ある程度の量のある物語や説明文を読んで内容を理解した後，教科書本文を音読練習し，教科書の写真や挿絵だけ載せたプリントを用いながら，即興的に教科書内容を要約したり，感想を述べたりする Retelling を行うことで，即興性を高めることを目指した。そして，話したことを書く活動を行うことにより，即興性と同様に正確性向上のための指導も行った。また，単元終末の言語活動においても即興性を担保できるような言語活動を設定し，終末に向けて，類似の活動を繰り返し行わせることで，正確性と即興性の両方を発揮できるような活動を行うことができた。

⑤指導形態について

・学習内容や学習形態の共有

小学校英語科で取り扱った題材を，中学校で発展的に取り扱うように工夫した。小学校で学習した内容を基盤として，中学校ではより発展的な内容を盛り込めるよう小・中9年間を見通した指導計画を再編成した。特に中学校第1学年において，小学校での学習内容，学習形態，言語材料，指導方法，指導教材を積極的に取り入れた。逆に，中学校では自分自身のことについて表現する題材があるため，小学校でも自分自身や身近なことがらについての表現を学ぶ単元を新設した。これらの共有化を図ることによって，生徒にとって過負荷となることを避けつつ，より発展的な言語活動を仕組むことができた。

・小中兼務教員の活用

研究開発学校として笠原小・中学校で1名の加配教員を得て，小中兼務教員として活用した。小中兼務としたのは，英語科指導における中1ギャップを解消することを目的としたからである。したがって，中学校第1学年を担当する英語科教員が小学校第6学年の英語科授業の全時間において学級担任と共にTTを実施することを基本とした。その際，小学校においては，学級担任が主たる指導者（T1）となり，小中兼務教員はサポート（T2）として指導に当たることとした。今年度は，小学校においては，第5学年（週1回），第6学年（週2回）の各2学級で小中兼務教員がT2となるTTを実施した。兼務教員は毎週2回（今年度は火曜日と木曜日）小学校で勤務した。その2回の交流の機会は，小・中学校のつながりを強固なものにし，カリキュラムや指導方法，児童生徒の状況を把握することに大きく役立った。小学校での指導内容を把握し，それを中学校英語科教員の間で共通理解したり，逆に中学校で

の様子を小学校に伝えたりするなど，小学校と中学校のパイプ役を果たした。

また，中学校においては，第1学年を3学級担当し，スタートカリキュラムにおいては，小学校と同じ活動形式や教材を積極的に用いて指導に当たることで，英語科指導における中1ギャップの解消を図ることができた。このことから，小中兼務教員の活用は概ね効果を上げることができたと考える。

（２）研究の経過

年次	実施内容等
第１年次	（１）小・中学校９年間を一貫した英語科の目標の設定 ①英語科の目標の設定 ②各学年の到達目標の設定 ③９年間を通した「コミュニケーション能力の基礎の段階表」の作成 （２）「笠原型コンテント・ベイスト」の手法による指導計画の改訂 ①小学校英語科指導計画の作成 （単元指導計画における指導目標・評価規準，活動，展開の見直し） ②小学校における英語を「読むこと」及び「書くこと」の指導計画の改訂 ③中学校英語科における評価につながる小学校英語科の評価方法の開発 ④中学校英語科スタートカリキュラムの改訂 ⑤中学校英語科指導計画の改訂 （３）英語教育を支える学習環境の充実 ①教室・学校環境の充実 ②英語や多文化に触れる体験活動の充実 ③職員研修の充実 （４）小・中学校の連携の推進 ①情報交換の充実 ②交流の充実 ③カリキュラムの連携の充実
第２年次	（１）小・中学校９年間を一貫した英語科の目標の改善 ①～③の実践を通した修正 （２）「笠原型コンテント・ベイスト」の手法による指導計画の改善 ※小学校における「英語科」授業の開始 ①～⑤の実践を通した修正 （３）英語教育を支える学習環境の充実の継続 ①～③の実践を通した改善 （４）小・中学校の連携の推進の継続 ①～③の実践を通した改善
第３年次	（１）小・中学校９年間を一貫した英語科の目標の確定 ①～③の確定 （２）「笠原型コンテント・ベイスト」の手法による指導計画の完成 ①②④⑤の指導計画集の作成 ③小学校英語科における評価方法の確立 （３）英語教育を支える学習環境の在り方の整理 ①～③の実践の継続と要件の整理 （４）小・中学校の連携の推進の在り方の整理 ①～③の実践の継続と要件の整理

（３）評価に関する取組

	評価方法等
第１年次	（１）小学校における「英検 Jr.学校版」及び中学校における「英検 IBA」の実施（日本英語検定協会）（小学校第４・５・６学年全児童：７月，中学校全校生徒：７月・２月） （２）児童生徒及び保護者の小・中一貫した英語教育に対する意識調査の内容の検討及び実施（全児童生徒及び保護者：７月） （３）小・中の発達の段階を踏まえ，「特定の課題に関する調査（英語：「書くこと」）」（国立教育政策研究所・教育課程研究センター・平成２２年）をもとにした経年比較で

第１年次	きる「書くことに関する調査」の内容の検討 （４）小・中の発達の段階を踏まえ，「小学校における英語教育の在り方に関する調査研究」（国立教育政策研究所・教育課程研究センター2009）における「スピーキング調査」「アルファベットクイズ」及び「特定の課題に関する調査（英語：「話すこと」）（中学校）」（国立教育政策研究所・教育課程研究センター・平成１７年）をもとにした経年比較できる「話すことに関する調査」の内容の検討 （５）「hyper-QU」による児童生徒の英語能力以外への波及効果に関する調査の実施（小学校第５・６学年全児童及び中学校全校生徒：７月） （６）その他，効果的な成果検証方法の情報収集
第２年次	・第１年次の（１）（２）（５）を継続し，経年比較した。（６）については効果的な検証方法を見つけることはできなかった。 ・第１年次の（３）実施（小学校第４・６学年全児童及び中学校全校生徒：７月）、（４）実施（小学校第２・４・６学年及び中学校全学年抽出学級児童生徒：７月）
第３年次	・第１・２年次の（１）～（５）を継続し，経年比較するとともに，３年間の推移を集約。

５　研究開発の成果

（１）実施による効果

①英語の技能について

小学校においては，児童の実態を全国の水準と比較するために，「特別版・児童英検」を実施した。結果は次のとおりである。なお，(　　)内は，英検 Jr.学校版の結果を示す。

【語句に関する問題の正答率】 第４学年　ブロンズ　85.3%（学校版全体 88.0%） 第５学年　シルバー　85.3%（学校版全体 85.5%） 第６学年　ゴールド　65.2%（学校版全体 65.4%）	【会話に関する問題の正答率】 第４学年　ブロンズ　82.0%（学校版全体 84.2%） 第５学年　シルバー　85.3%（学校版全体 75.9%） 第６学年　ゴールド　66.5%（学校版全体 64.0%）
【文章に関する問題の正答率】 第４学年　ブロンズ　86.3%（学校版全体 86.7%） 第５学年　シルバー　80.8%（学校版全体 82.4%） 第６学年　ゴールド　69.9%（学校版全体 65.2%）	【文字に関する問題の正答率】 第５学年　シルバー　93.5%（学校版全体 89.1%） 第６学年　ゴールド　63.2%（学校版全体 70.4%）

第4学年では，「語句」「会話」「文章」に関する問題で測ることのできる外国語表現・理解の能力については，学校版全受検者の平均をやや下回る結果であった。「語句」「会話」「文章」の各分野において5問，100%の正答率である一方，極端に正答率が低いものが3問ある。第5学年では，「語句」「文章」については学校版全受検者の平均をやや下回ったものの，「会話」「文字」の各分野においては学校版全受験者の平均より上回り，「文章」「文字」の分野で2問，100%の正答率のものがあった。第6学年では，「文字」の分野が学校版全受検者の平均を大きく下回ったものの，その他の分野は平均とほぼ同じかやや上回る結果となった。

『英検 Jr. 学校版』の解説には，先進的な英語教育を行っている地域や研究開発校で活用されていると記されており，本校と同様の受検の様子が推察できる。その上で上記の結果を見ると，本校のカリキュラムにある学習内容については，全体に十分に力を付けている一方，学習してないことについては，前後の単語や文脈等から推察して判断するところまでは到達していないことが分かる。今後は，発展的な学習として部分的に初めての単語が混ざっている文章にも触れる機会を設けるようにしていきたい。

中学校において，全国と本校第3学年生徒を比較した結果は，次のとおりである。

「平成17年度　国立教育政策研究所『特定の課題に関する調査（英語：「話すこと」）』」より§1と3を抜粋して調査した。全15問中9問において，全国正答率を上回った。「平成22年度　国立教育政策研究所『特定の課題に関する調査（英語：「書くこと」）』」では，§1～5まで，全18問を調査した。全18問中15問において，全国正答率を上回った。どちらの調査も7月に実施した。平均点を下回る項目は，小中9年間を通して使用する機会が少ない単語や，中学校でのみ扱っている言語材料が多い。「英検 IBA（日本英語検定協会）」は，全学年で同じ調査を7月に実施した。第3学年において，英検3級程度の力がある生徒の割合は50．0%であった。昨年度の42．4%から約

8％増加していることから，正確さを高める指導は一定の効果が出ていると考えている。しかし，2年前の58．3％には約8ポイント下回っているため，さらに，正確さを高める指導を検討するとともに，教師の使用する英語の正確性も高めていくよう改善していく必要がある。

②児童生徒の意識について

英語に対する児童生徒の意識を把握するために，「岐阜県英語拠点校区児童・生徒意識調査」を行った（平成29年7月）。結果は次のとおりである。

・「英語」が好き　　単位：％

項目	小学校　※（ ）内の数値は平成28年7月				中学校　※（ ）内の数値は平成28年7月			
	第2学年	第4学年	第6学年	全体	第1学年	第2学年	第3学年	全体
好き	66．7	57．1 （40．7）	49．3 （53．2）	60．7 （47．0）	45．8 （42．2）	51．1 （40．5）	69．2 （28．9）	55．7 （36．9）
どちらかといえば好き	28．9	38．1 （37．3）	25．4 （22．8）	29．0 （30．0）	30．0 （42．2）	27．4 （43．0）	25．9 （36．7）	27．7 （40．5）
どちらかといえば嫌い	4．4	4．8 （16．9）	19．0 （20．2）	8．2 （18．5）	17．1 （12．0）	17．9 （11．4）	4．9 （ 25．6）	13．2 （16．7）
嫌い	0	0 （5．1）	6．3 （3．8）	2．1 （4．5）	7．1 （ 3．6）	3．6 （ 5．1）	0．0 （ 8．9）	3．4 （ 6．0）

・「英語」の授業が好き　　単位：％

項目	小学校　※（ ）内の数値は平成28年7月				中学校　※（ ）内の数値は平成28年7月			
	第2学年	第4学年	第6学年	全体	第1学年	第2学年	第3学年	全体
好き	75．6	66．7 （59．4）	54．0 （50．6）	67．7 （55．0）	38．6 （43．4）	31．0 （22．8）	58．1 （27．8）	42．5 （31．3）
どちらかといえば好き	24．4	28．6 （34．4）	23．8 （30．4）	25．0 （32．4）	42．9 （44．6）	47．5 （58．2）	32．1 （46．7）	40．9 （49．6）
どちらかといえば嫌い	0	4．7 （1．6）	19．0 （11．4）	5．8 （6．5）	11．4 （9．6）	16．7 （10．1）	8．6 （ 20．0）	12．3 （13．5）
嫌い	0	0 （4．6）	3．2 （7．6）	1．5 （6．1）	7．1 （ 2．4）	4．8 （ 8．9）	1．2 （ 5．6）	4．3 （ 5．6）

・英語の文字を読むことは楽しい（小学校）　単位:％

項目	第4学年	第6学年	全体
楽しい	54．8 （35．9）	55．6 （53．2）	56．1 （44．4）
どちらかというと楽しい	35．7 （41．0）	20．6 （31．6）	27．1 （36．2）
どちらかというと楽しくない	7．1 （23．1）	17．5 （10．1）	11．5 （16．7）
楽しくない	2．4 （0）	6．3 （5．1）	5．3 （2．7）

・英語の文字を書くことは楽しい（小学校）　単位:％

項目	第4学年	第6学年	全体
楽しい	59．5 （55．9）	55．6 （48．1）	64．5 （52．3）
どちらかというと楽しい	28．6 （25．8）	27．0 （30．4）	21．2 （27．9）
どちらかというと楽しくない	9．5 （14．6）	9．5 （13．9）	9．7 （13．9）
楽しくない	2．4 （3．7）	7．9 （7．6）	4．6 （5．9）

・外国の人が話しかけてきたら，あなたはどうすると思いますか（中学校）単位：％

項目	第1学年	第2学年	第3学年	全体
英語で答える	79．9	84．5	96．3	87．2
日本語で答える	8．6	3．6	2．5	4．7
だまっている	2．9	4．8	0．0	2．6
その場から逃げる	8．6	7．1	1．2	5．5

ア　小学校について

平成29年度の「英語が好き・どちらかといえば好き」と回答している児童の割合は，全校平均で89．7％，第4学年及び第6学年の全体では85．0％（平成28年度は77．0％），また，「英語の授業が好き・どちらかといえば好き」と回答している児童の割合は，全校平均で92．7％，第4学年及び第6学年の児童全体では86．6％（平成28年度は87．4％）と，いずれも高かった。楽しい理由として，下学年では英語を使ったゲームが楽しい，ボランティアでお手本をするのが好き，ショップ形式のやりとりが楽しい等，英語を使うということ以外の楽しさが含まれる。しかし，

学年が進むにつれ，新しい英語での表現ができるようになること，よく考えて話したことが相手に伝わったときにうれしい，先生が「この言い方，いいね」と褒めてくれたこと等，より質の高い理由を挙げている。これらの記述から，できるようになったという達成感を味わい，その積み重ねによって自己肯定感も上がってきていると考えられる。

また，「英語の文字を読むことは楽しい・どちらかというと楽しい」と回答している児童全体の割合が83．2％（平成28年度80．6％），「英語の文字を書くこと（文字をなぞる，カードを並べる活動を含む）は楽しい・どちらかというと楽しい」と回答している児童の割合が85．7％（平成28年度80．2％）という高い結果となった。平成24年度から始めた文字に慣れ親しむ指導が児童の興味・関心に応じたものになっていること，十分に音声に慣れ親しんだ後に文字に関する指導をするという学習過程が子どもたちに安心感を与え，文字を読んだり書いたりすること自体を楽しめるようになってきつつあることがうかがえる。

イ　中学校について

7月に意識調査を行い，平成28年度の結果と比較した。この調査結果から，「英語が好き・どちらかといえば好き」と答えている生徒の割合は全体で83．4％，「英語の授業が好き・どちらかといえば好き」と答えている生徒の割合は全体で83．4％である。また，「外国の人が話しかけてきたら，あなたはどうしますか。」という問いに対して，「英語または日本語で答える」と答えている生徒は全体で91．9％である。このことから，実際に言語を使用する場面においても，恐れることなく挑戦しようとする態度が育ってきていることが分かる。また，学年が進むにつれ，その数値が増えることから，英語で対応できる語彙が増えるとそのことが自信につながるということも推察される。

しかし，「英語の授業で困ること」の項目の内，「話したいことを話すことができない」「書きたいことを書くことができない」と答えた割合も昨年同様に増加傾向にあることから，即興性を求める活動を多く取り入れたことにより，生徒が活動中に困る場面が多くなったことが要因と考えられる。また，正確性を求める指導を行ってきたため，何とかして伝えようとする意欲がありながら，表現の正しさが気になり，伝えたいことをうまく伝えられないという要因も考えられる。今後も，引き続き言語材料を繰り返し指導しつつ，正確性と即興性のバランスを考えた指導を大切にしたい。

③英語教育以外への波及効果について

英語教育以外への波及効果を検証するために，多治見市教育委員会が各学校で実施している「hyper-QU（図書文化社）」を活用した（平成29年5月）。以下がその結果である。

《学校生活プロフィール》

・「学級生活満足度」（学級内に自分の居場所があり，学校生活を意欲的に送っている児童生徒の割合）

小学校　単位：％			中学校　単位：％			
全国	第５学年	第６学年	全国	第１学年	第２学年	第３学年
３９．０	６３．０	７２．０	３７．０	５７．０	６０．６	７１．０

・「友だち関係」（友だち関係づくりに積極的に取り組んでいると回答した児童生徒の割合）

小学校　単位：％			中学校　単位：％			
全国	第５学年	第６学年	全国	第１学年	第２学年	第３学年
８２．５	８９．１	８９．２	８５．０	８９．０	８８．８	９３．１

・「学習意欲」（学習に積極的に取り組んでいると回答した児童生徒の割合）

小学校　単位：％			中学校　単位：％			
全国	第５学年	第６学年	全国	第１学年	第２学年	第３学年
７９．２	８２．５	８４．２	７４．０	８３．５	８１．０	８１．７

・「学級の雰囲気」（学級の雰囲気づくりに積極的に取り組んでいると回答した児童生徒の割合）

小学校　単位：％			中学校　単位：％			
全国	第５学年	第６学年	全国	第１学年	第２学年	第３学年
８０．８	９０．８	８９．２	７６．０	８３．０	８４．２	８５．２

小学校では，「学級生活満足群」に属する児童の割合が，第5学年が63％，第6学年が72％と全国の数値を大きく上回っている。中学校では，「学級生活満足群」に属する生徒の割合は，全学年において全国の数値を大きく上回り，学年が進むにつれて上昇している。さらに，「友だち関係」「学習意欲」「学級の雰囲気」についても，全て

の学年で全国の数値を上回っている。この結果から，自ら学習意欲をもつだけでなく，友だち関係づくりや学級の雰囲気づくりに積極的に取り組んでいる結果，学校生活に満足している児童生徒が多くいることが分かる。

これらの要因として，小・中学校共に，「笠原型コンテント・ベイスト」の手法を用いたコミュニケーションを図る活動を通して，互いの考えや気持ちを伝え合い，理解し合うことが，仲間関係づくりにも効果的であると考えられる。

④教師への効果

小学校において，昨年度から英語科としての指導に移行し，教育通信にも評定を付けることにした。それに伴って昨年は小・中9年間及び学年毎の到達目標の作成，単元指導計画の見直し，評価規準の設け方，定着や習熟を図るための指導・援助の在り方，効果的なパフォーマンステストの実施方法，評定の付け方等について職員研修を通して共通理解を図った。その上で，本年度は，これらの内容ややり方を見直したり，細かな部分の調整を行ったりした。7月の第1回運営指導委員会では，英語科の授業を公開し，各委員から多くの指導を受けた。また，全学級担任が夏休み前までにE活動（帯活動）や英語科の授業を公開し，外部指導者から指導を受けた。このことを通して，全職員で単元の内容の改善の方向を共通理解するとともに，指導内容・指導方法を工夫することができた。

小学校の第3学年から第6学年の学級担任及び中学校英語教員に対して，意識調査を行った。意識調査は，岐阜県教育委員会から出されている「外国語活動・英語に関するアンケート」を活用した。

小学校の85．7％の学級担任が，「8割以上の児童が，英語の授業を楽しみにしている」と回答した。また，全ての学級担任が，「ほとんどの児童が，活動に積極的に取り組む姿が見られる」と回答した。さらに，全ての学級担任が，「毎時間の授業のあいさつを英語で」行い，「英語の会話のモデルを示すこと」を「ほぼ毎時間行う」と回答していることから，英語への慣れ親しみがもてるよう，教師が率先して英語の使用を心がけていることが分かる。そして，ほぼ全ての学級担任が，「教材・教具の作成」「担当者や他学級担任やALTとの打合せ」を「十分」または「どちらかというと十分」と回答していることからも，授業前の準備に力を入れていることが分かる。

また，中学校の意識調査結果で，次の項目は全ての英語教員が実行していると答えたものである。

・生徒の興味・関心に即して表現内容の充実を図ることができるよう，適切な教材を与えること
・自分の考えや気持ちを即興的に英語で表現させること
・言語材料が定着するよう反復練習をすること

これは，指導計画を工夫・改善し，定着を図りたい言語材料を繰り返し使用することができるようにしたことによるものである。同様に，指導計画や指導案の作成，教材・教具の作成が十分であると英語教員全員が答えている。

一方で，「小学校との連携が十分ではない。」と答える教員が多い。小学校英語科への教科化にともない，指導計画や指導方法を変更している点が多く，それを十分に中学校が把握できていない現状がある。本来は小中兼務教員がそれを把握して中学校に伝える役を担っているが，小中兼務教員も小学校の高学年を担当する教員も，人事異動等の理由で毎年変わっている。各校での引き継ぎに関しては密に行うことで対応することができていたが，小・中学校間での引き継ぎは不十分であると感じる部分もあった。そのため，小・中学校双方が互いの指導内容や指導意図を理解し合い，さらなる連携の強化を図る必要性を強く実感している。

⑤保護者等への効果

小・中学校において，共通の保護者アンケートを実施し，保護者の英語教育に対する意識を把握した。小学校で98．6％，中学校で97％の保護者が小学校第1学年から英語を学習することに賛成している。その理由としては，

・小さいうちから学習することで，英語に興味をもつことができる。
・早い時期から英語に親しむことで自然に英語が身に付き，将来の職業選択の幅が広がる。
・将来必ず必要になる。
・小学生のうちから英語を習った方が，英語に対する抵抗がなくなり，身に付きやすい。
・外国人との交流で動じず，話したり，文化の違いなどを理解したりする力を学ぶことができる。
・コミュニケーションが豊かで誰にでも話しかけられる所は小さい頃からの英語教育のおかげだと思う。
・国際社会である現在，将来どのような職業についても，英語は役立つと思う。

といった内容が主なものであった。

小・中学校の保護者全体の意見は，次のいずれかの理由に集約することができる。

・英語に抵抗感がなく，外国の人にも積極的に接することができるようになる。
・グローバル化が進んでいるため，英語は必要である。
・中学校での英語学習にスムーズに入ることができる。

また，今後の英語教育についてさらに期待することとして，小・中学校ともに「外国の方と交流をする機会を設けること」が一番多かった。

なお，反対意見としては，少数（全体の1％）ではあるものの，

・英語教育よりまず日本語教育をしっかりやってほしい。

・他教科の負担となるなら反対である。

等，英語教育に比重が置かれることによる他教科に及ぼす影響への懸念の声もあった。

（２）研究開発実施上の問題点と今後の課題

①小学校について

習熟・定着を図る指導として導入で“Small Activity”を行ったが，より効果を上げるため，学年間の系統を明らかにし，詳細な“Small Activity”の指導計画を作成する必要がある。どのような学習の段階を踏んでいくことが言語材料を身に付けさせることになるのか，また，即興的にどのような言語材料を使うことが適切なのかを考えていきたい。

また，“Small Activity”と“Check Time”を新たに，単位時間内に位置付けたことで，従来行ってきた学習をそのまま行うことが時間的に難しくなってきた。時間を短縮するために児童の学習過程の整理をし，指導内容や指導方法，活動形態を見直すことで，単位時間における指導過程の見直しをしていく必要がある。

「読むこと」及び「書くこと」の指導に関わって，本来，音声を主として指導すべきところを，文字を提示し，文字を使って指導することに陥ることが度々あった。そのため，文字に対する抵抗感を感じる児童が出てきたり，児童の意識の流れに沿わない授業になってしまったりすることがあった。基本に立ち返り，音声による指導を行い，十分に慣れた後で文字を提示するということを徹底していく必要性がある。

評価内容及び評価方法に関わって，今年度，評価項目の多さから，煩雑になることのないように改善を図ったが，授業での行動観察の方法が徹底されなかったことや，各種テストの難易度，問題数の偏りがあったこと等，客観性，信頼性の観点から，適切な評価を行うための今後に向けての課題が浮かび上がってきた。

②中学校について

今年度は，小・中学校9年間を見通した「目標の段階表」と，それらを学年毎に整理した「学年毎の目標の段階表」の改定を行い，完成版を作成した。それを受け，単元指導計画の「評価規準・方法」を新たに設定した。さらに，昨年度までの実践を受けて各学年の指導内容及び方法について検討し，「正確性を高める時間」と「即興性を高める時間」のを明確にして指導を行った。その際，これまで行ってきた Retelling の在り方についても見直し，課題となっていた質問文等，やり取りの多い表現においても対応できるものにすることができた。また，正確性の向上については，徐々に成果が出てきていると考える。昨年度，7月の「英検 IBA」の結果は，3級程度の力を有している生徒は全体の42．4％であり，平成26年度と比べると約16ポイント減少していた。今年は50．0％へと伸びており，昨年度の第3学年が2月に受験した際には，約60％に達していたことから，同程度の結果を予想している。教師の英語力についても，岐阜県総合教育センターの研修を受講したり，授業内で扱う英語表現について教科部会で交流したりすることで，正確な表現を用いることについて，全職員で意識を高めることができた。

今後はこれまでの研究成果を踏まえ，スタートカリキュラムについては，小学校での英語科の完全実施を受け，教科書の使用前の「スタートの時間」の在り方の見直しを図る。また，正確性と即興性のバランスを大切にしたカリキュラムの工夫や実践を行い，より効果的な指導方法を追究していく。

別紙１

多治見市立笠原小学校　教育課程表（平成２９年度）

	各教科の授業時数									道徳	外国語活動	特別活動	総合的な学習の時間	新設教科・英語	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育						
第１学年	306	0	136	0	67 (-35)	68	68	0	102	34	0	34	0	35 (+35)	850
第２学年	315	0	175	0	70 (-35)	70	70	0	105	35	0	35	0	35 (+35)	910
第３学年	245	70	175	90	0	60	60	0	105	35	0	35	10 (-60)	60 (+60)	945
第４学年	245	90	175	105	0	60	60	0	105	35	0	35	10 (-60)	60 (+60)	980
第５学年	175	100	175	105	0	50	50	60	90	35	0 (-35)	35	35 (-35)	70 (+70)	980
第６学年	175	105	175	105	0	50	50	55	90	35	0 (-35)	35	35 (-35)	70 (+70)	980
計	1461	365	1011	405	137 (-70)	358	358	115	597	209	0 (-70)	209	90 (-190)	330 (+330)	5645

多治見市立笠原中学校　教育課程表（平成２９年度）

	各教科の授業時数									道徳	特別活動	総合的な学習の時間	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	外国語				
第１学年	140	105	140	105	45	45	105	70	140	35	35	50	1015
第２学年	140	105	105	140	35	35	105	70	140	35	35	70	1015
第３学年	105	140	140	140	35	35	105	35	140	35	35	70	1015
計	385	350	385	385	115	115	315	175	420	105	105	190	3045

別紙２

学校等の概要

【小学校】

１　学校名，校長名

タジミシリツカサハラショウガッコウ　　サカイ　シゲル
多治見市立笠原小学校　　酒井　茂

２　所在地，電話番号，ＦＡＸ番号

岐阜県多治見市笠原町３３８７番地の９　　TEL 0572-43-3541　　FAX 0572-43-4869

３　課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数，学級数

第１学年		第２学年		第３学年		第４学年		第５学年		第６学年		特別支援		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
62	2	45	2	50	2	43	2	59	2	65	2	7	2	331	14

４　教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭
1	0	1	0	0	15	0	1	0	0
講師	ＡＬＴ	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計				
2	2	0	1	0	23				

【中学校】

１　学校名，校長名

タジミシリツカサハラチュウガッコウ　　オカダ　ミホ
多治見市立笠原中学校　　岡田　海保

２　所在地，電話番号，ＦＡＸ番号

岐阜県多治見市笠原町２４５５番地の１２　TEL 0572-43-4165　FAX 0572-43-4892

３　課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数，学級数

第１学年		第２学年		第３学年		特別支援		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
76	3	87	3	82	3	9	3	254	12

４　教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭
1	0	1	0	0	18	0	1	0	1
講師	ＡＬＴ	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計				
3	1	1	1	0	28				